慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	後期マムルーク朝有力官僚と聖地： ザイン・アッ=ディーン・イブン・ムズヒルの巡礼とハラマインにおける慈善
Sub Title	Zayn al-Dīn ibn Muzhir's pilgrimages and charitable achievements in al-Ḥaramayn
Author	太田 (塚田), 絵里奈(Ōta (Tsukada), Erina)
Publisher	三田史学会
Publication year	2019
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.2 (2019. 4) ,p.23(187)- 52(216)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20190400-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

後期マムルーク朝有力官僚と聖地

――ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの巡礼とハラマインにおける慈善――

太田（塚田）絵里奈

一．序論

マムルーク朝期（一二五〇～一五一七年）を通じ、ヒジャーズ地方に位置するメッカ・メディナの両聖地は、トルコ・チェルケス系のマムルーク軍人による統治の正統性を保証するための極めて重要な拠点であり続けた。「両聖地の僕（ハーディム・アル＝ハラマイン khādim al-Ḥaramayn）」を自称する歴代のマムルーク朝スルターンは、キスワ（カアバ神殿の黒布）の送付権を保持し、巡礼路の安全を組織的に確保することで、イスラーム諸国に広くその優越性を誇示するとともに、同地に対する大規模な寄進を行ない、公正かつ敬虔な統治者像の形成に努めた。また、学都でもあった両聖地はイスラーム圏全域からウラマーを引き寄せ、「ムジャーウィル mujāwir」と呼ばれた信仰と学問に専心する長期逗留者を多数抱えていた。

近年の研究成果によって、このような巡礼、寄進に基づく王権の聖地に対する関与やウラマーの聖地逗留の実態は明らかとなりつつある。[1] だが、アラブ系文民エリートとして行政組織の中核を担った官僚と聖地との関わりについては、これまで十分な関心が払われてこなかった。彼らは年毎の巡礼団に中心人物として名を連ねたのみならず、その多くが聖地滞在を通じて勉学や善行に励み、なかには軍人に匹敵する規模で慈善事業を展開した者もいた。それにもかかわらず、これらの動機や聖地における行動の具体的様相、そして彼らのキャリアとの関連性

については全く明らかにされていない。

本稿は、マムルーク朝における官僚と聖地の関係を解明するための試論として、後期（チェルケス・）マムルーク朝（一三八二～一五一七年）末期の最有力官僚の一人である、ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒル Zayn al-Dīn Abū Bakr ibn Muḥammad ibn Muzhir al-Qāhirī al-Dimashqī al-Anṣārī al-Shāfiʿī（八三一～八九三／一四二八～一四八八年）の行なった巡礼と両聖地における慈善・善行に焦点を当てる。ザイン・アッ＝ディーンは書記の頂点であるカーティブ・アッ＝スィッル（文書庁長官 kātib al-sirr）職を二六年間という長期にわたって担ったカーイトバーイ期（一四六八～一四九六年）の文民行政官であるが、頻繁な任免を国策とした当該時代の官僚としては例外的な、「失脚なきキャリア」を通じて形成した莫大な資産を背景に、カイロ、ダマスクス、エルサレム、メッカ、メディナという領内各都市において大規模な慈善を展開した。チェルケス期官僚の慈善事業に関する全般的な傾向は、マルテル＝トゥミアン、ベーレンス＝アブーセイフ、五十嵐らによって提示されているが、[3] 彼らによる慈善の大部分が首都カイロに集中しており、ヒジャーズを含む多地域にわたり文書庁の官僚が慈善を展開した例は他にみられない。[4] ザイン・アッ＝ディーンに関しては詳細なキャリア及び家族構成が判明しており、[5] その生涯において三度の聖地巡礼を経験しているが、ヒジャーズとの政治的・職務的関係は確認されない。[6] そのため、彼と聖地との関わりは、巡礼と同地におけるイスラーム的善行の実施が中心であったといえる。

本稿においては、まずザイン・アッ＝ディーンの行なった三度の巡礼について、史料記述の最も豊富な第三回を中心に、彼が巡礼の随行者として選定した人物と、両聖地における行動形態に着目しつつ再構成する。続いて彼がメッカ・メディナに展開した慈善及び善行を、第三回巡礼時とそれ以後の時期に分類して検討する。そして聖地における諸実践を当人のキャリアや人的関係と照合し、またそれらに投影された彼自身の宗教的指向性を検討することで、聖地における諸事業・諸実践が一人の有力官僚のライフヒストリーにおいて有した意義を明らかにしたい。

二　巡礼

1．第一回（八五〇／一四四六―四七年）・第二回（八六一／一四五七年）巡礼

ザイン・アッ＝ディーンが初めて巡礼を行なったのは八五〇／一四四六―四七年である。[7] 巡礼の契機については、当時カーティブ・アッ＝スィッルであったカマール・アッ＝ディーン・イブン・アル＝バーリズィー Kamāl al-Dīn Muḥammad ibn al-Bārizī（七九六～八五六／一三九四～一四五二年）から巡礼団に加わるよう提案を受けたためとある。[8] カマール・アッ＝ディーンはその妹でスルターン・ジャクマク（在位一四三八～一四五三年）の妻であるムグル Mughul（八〇三～八七六／一四〇一～一四七二年）とともに、この年の巡礼団における最有力者であった。[9]

ムズヒル家とバーリズィー家はともにスルターン・ムアイヤド・シャイフ（在位一四一二～一四二一年）によって登用されたシリア出身の文民エリート家系であり、ザイン・アッ＝ディーンの父バドル・アッ＝ディーン Badr al-Dīn Muḥammad（七八六～八三二／一三八四―八五～一四二九年、バドル・アッ＝ディーン二世）は、カマール・アッ＝ディーンがエジプトのカーティブ・アッ＝スィッルに就任した際、その副官を務めた。[10] バドル・アッ＝ディーンの死後、幼少であったザイン・アッ＝ディーンはバーリズィー家の子弟とともに官僚としての専門教育を受けた。[11] 巡礼時のザイン・アッ＝ディーンは一八歳で、中央政府における要職に就任した経験はなく、[12] カマール・アッ＝ディーンが実質的な彼の後見人であったと考えられる。またこの巡礼にはザイン・アッ＝ディーンの妻となる、カマール・アッ＝ディーンの孫ズバイダ Zubayda ibna al-Bahā' Muḥammad ibn Ḥijjī も同行しており、[13] この段階ですでにバーリズィー家と姻戚関係にあった可能性がある。

ザイン・アッ＝ディーンは巡礼に二、〇〇〇ディーナール以上を投じ、カマール・アッ＝ディーンを凌ぐ豪奢なキャラバンを組織したと伝えられる。[14] バドル・アッ＝ディーン二世及びその後継者となった長兄ジャラール・アッ＝ディーン Jalāl al-Dīn Muḥammad（八一四～八三三／一四一一―一二～一四三〇年）が死亡して二〇年近くが経過していたにもかかわらず、ザイン・アッ＝ディーンが潤沢な経済基盤を有していた点は、同家に官職の俸給及び職位に付随する余得以外の収入源があ

ったことを示唆している。

二度目の巡礼は彼がナーズィル・アル＝イスタブル（スルターン厩舎監督官 nāẓir al-istabl）とナーズィル・アル＝ジャワーリー（人頭税監督官 nāẓir al-jawālī）を兼任していた八六一／一四五七年に行なわれた[15]。この巡礼団では、当時のスルターン・イーナール（在位一四五三～一四六一年）の妻であるザイナブ Zaynab ibna Ḥasan ibn Khāṣṣ Bak（八八四／一四七九―八〇年歿）とその一族、カーティブ・アッ＝スィッルのムヒッブ・アッ＝ディーン・イブン・アル＝アシュカル Muḥibb al-Dīn Muḥammad ibn al-Ashqar（七八〇～八六三／一三七八―七九～一四五九年）らが巡礼を果たした[16]。ザイナブは国政に介入し、要職に対する人事権を行使するなど、歴代のスルターンの妻たちのなかでも傑出した人物であったが、彼女がザイン・アッ＝ディーンの母親ハディージャ Khadīja ibna Amīr Ḥājj ibn al-Baysarī（八七八／一四七四年歿）を厚く重用したことは、イーナール期にザイン・アッ＝ディーンが要職を歴任する要因となった[17]。

第一回、第二回の巡礼は、父母を通じて緊密な関係にあった有力者に同行することで達成されたものであり、ザイン・アッ＝ディーン自身の巡礼に対するイニシアティブを示す記述は得られない。それに対し、カーティブ・アッ＝スィッル職就任後の彼が三八歳で行なった三回目の巡礼には、明らかな主体性が観察される。その際、彼はいかなる意図をもって巡礼に向かったのだろうか。

2．第三回（八七一／一四六七年）巡礼

（1）行程

ザイン・アッ＝ディーンが行なった三度目の巡礼（八七一／一四六七年）については、大部な名士伝記集『九世紀の人々の輝く光 *al-Ḍaw' al-Lāmi' li'l-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*』の著者として名高い、歴史学者・ハディース学者のサハーウィー Shams al-Dīn Muḥammad al-Sakhāwī（八三〇～九〇二／一四二七～一四九七年）が詳細な記述を残している。サハーウィーはこの第三回巡礼時にメッカに逗留しており、ヒジュラ暦八九〇年代にはザイン・アッ＝ディーンがメディナに創建したムズヒリーヤ学院 al-Madrasa al-Muzhiriyya に滞在した[18]。

サハーウィーによれば、「聖なるアッラーの住処への巡礼、また偉大なる廟［への訪問］を達成したいと熱望するようになった」ザイン・アッ＝ディーンは、スル

ターン・フシュカダム（在位一四六一～一四六七年）に対して暇乞いを繰り返し、ようやく巡礼と不在時の代理を立てる許可を得たという。[19] したがって、巡礼に対する希望及び構想は八七一／一四六七年以前から抱いていたと考えられる。まずは諸史料の記述に従い、その行程及び各地での実践を時系列的に整理しよう。

八七一年ジュマーダー・アル＝アーヒラ月二九日／一四六七年二月五日、必要物資を整えたザイン・アッ＝ディーンは、母親ハディージャと妻、子供たちを伴い、煌びやかなキャラバンでカイロを出立した。[20] 子供たちのなかで同行が確実なのは、後にザイン・アッ＝ディーンの後継者となるバドル・アッ＝ディーン Badr al-Dīn Muḥammad（八六〇～九一〇／一四五五―五六～一五〇四年、バドル・アッ＝ディーン三世）であり（後述）、ここで言及される妻は、ザイン・アッ＝ディーンの妻たちのなかで中心的位置づけにあった前述のズバイダであろう。

カイロ北東約一〇キロに位置する「巡礼者の池 Birkat al-Ḥājj」の出発がラジャブ月三日／二月八日であることから、ザイン・アッ＝ディーンが長期的な聖地逗留を意図したことは明らかである。[21] アミール・アッ＝ラクブ[22]（第一巡礼隊長 amīr al-rakb）を務めた十人長のアッラーン・アル＝アシュラフィー ʻAllān min Ṭuṭukh al-Ashrafī（八八六／一四八一年歿）は、巡礼を通じてザイン・アッ＝ディーンの「小さき泉［良き助け］であった」という。[23]

巡礼団がメディナに到着した日付に言及は見当たらないが、同地には六日間滞在したというサハーウィーの言及に基づけば、到着はシャアバーン月五日／一四六七年三月一二日頃である。[24] ザイン・アッ＝ディーンはまず預言者廟を訪問し、メディナの貧者たちに対するサダカ（自発的喜捨 ṣadaqa）を行なった。続いて預言者廟の修繕を指示し、預言者と歴代のカリフに対するドゥアー（祈願 duʻā）を行なったとされる。また、金曜日には説教師として預言者モスクのミンバル（説教壇 minbar）に登壇した。公共墓地バキーウの訪問を経て、シャアバーン月一一日／一四六七年三月十八日にメディナを出発した。[25]

メッカに到着したのはシャアバーン月一六日／三月二三日であった。[26] 大巡礼の開始（ズー・アル＝ヒッジャ月八日／七月一一日）まで三カ月以上余裕のある日程であり、ラジャビーヤによる巡礼を選択した目的はこのメッ

カ滞在にあったといえよう。当時メッカに滞在していたサハーウィーによれば、滞在中のザイン・アッ＝ディーンはウムラ（小巡礼）、タワーフ（カアバ神殿の周回）、貧者に対するサダカなどの宗教実践を行なったほか、同地にリバートを設立するためのワクフを設定し、枯渇していたバーザーンの泉 ʿayn Bāzān の修復を手掛けた。またメッカ在住のウラマーとの交流を深め、タサウウフを中心とした学問に没頭したという。[27]

大巡礼を終えたザイン・アッ＝ディーンはスルターン・フシュカダムから復職を要請する書簡を受け取り、再度のメディナ訪問を経て、八七二年ムハッラム月二〇日／一四六七年八月二一日、「巡礼者の池」に帰還した。[28]他の巡礼団に先んじて「壮麗な乗り物 markab で登場した」ザイン・アッ＝ディーンに対し、王朝の名士たちが参集したとあり、無事の帰還を祝す恒例の行進が行なわれたと推定される。[29]翌二一日／八月二二日にカイロ城に登城し、カーティブ・アッ＝スィッルへの復職のヒルア（名誉の衣 khilʿa）を授与された。[30]

ザイン・アッ＝ディーンがラジャビーヤ巡礼団として本隊に先んじてメッカに到着した主な目的の一つは、現地ウラマーとの学的交流にあったと考えられる。メッカに比してメディナでの滞在は短期間であったが、以下で詳述する通り、メディナにおいても大規模な慈善・善行が実施された。行程及び各聖地での実践を総合すれば、預言者廟の修繕は事前に計画されており、現地でのみ達成可能な諸実践及び学問修得を重視した結果、メッカ滞在に比重を置いた旅程を採用したと考えられる。

（2）同行者

ザイン・アッ＝ディーンの組織した巡礼団には、血縁者のほか、彼と個人的関係の深い多数のウラマー、官吏、スーフィーらが含まれていた。サハーウィーによれば、ウラマー、有徳の人々 al-fuḍalāʾ、聖者たち al-ṣulaḥāʾ、ムワッキウ（書記 muwaqqiʿ）・ムバーシル（執達吏 mubāshir）ら吏員たち、その他のエジプト、シリア、ハマーの人々がザイン・アッ＝ディーンとともにあった。彼らは、ザイン・アッ＝ディーンが「善行と慈善によって、諸般の面倒を見ていた人々」であったという。[31]ザイン・アッ＝ディーンは自身のパトロネージや影響下にあった人々を選定し、部分的にせよ、彼らの巡礼に関わる費用を負担することで随行させたと考えられる。

以下では、同時代の年代記、名士伝記集を通じ、ヒジ

ユラ暦八七一年にザイン・アッ＝ディーンの巡礼団（ラジャビーヤ）で巡礼したことが確認される人物について概観する。

a．ムズヒル家の関係者

メッカ在住の歴史家イブン・ファフド　Najm al-Dīn ʿUmar ibn Fahd al-Hāshimī al-Makkī（八一二～八八五／一四〇九～一四八〇年）は、この年にメッカに到着した巡礼者に関する言及のなかで、その最有力者はザイン・アッ＝ディーンであり、子供たち awlād、母親（一覧②）、妻、幼児たち ʿiyāl を伴ったと述べる。[32] ここで言及される子供とはバドル・アッ＝ディーン三世（一覧①）のほか、長男サアド・アッ＝ディーン Saʿd (Burhān) al-Dīn Ibrāhīm（八九五／一四九〇年歿）[33]、後にスルターン・ジャーンブラート（在位九〇五～九〇六／一五〇〇～一五〇一年）と通婚する娘　Bint Abū Bakr らを指し、[34] 妻に続いて言及される幼児たちは、ズバイダ（一覧③）との間に誕生した、当時割礼を経ていない子供たちと考えられる。[35]

ズバイダは、官僚名家バーリズィー家とイブン・ヒッジー家双方の血統を引き、自身もハディース学を修めた教養人であり、ザイン・アッ＝ディーンの没後（八九三／一四八八年）は残された子弟たちに「最良の養育を行なった」という。[36] また彼女の兄／弟で、ザイン・アッ＝ディーンに続いてエジプトのナーズィル・アル＝ジャイシュ（軍務庁長官 nāẓir al-jaysh）に就任したナジュム・アッ＝ディーン Najm al-Dīn Yaḥyā（八三八～八八八／一四三五～一四八三年）（一覧④）と両名の母ザイナブ Zaynab ibna al-Kamāl al-Bārizī（八七五／一四七〇年歿）（一覧⑥）も同行している。[37] ザイナブは幼少期のザイン・アッ＝ディーンの後見人であったカマール・アッ＝ディーンの娘である。

他方、血縁及び姻戚関係にない家族関係者としては、マムルーク朝末期ダマスクスのウラマー名家・フルフール家の人物が注目される。巡礼には同家のシャラフ・アッ＝ディーン Sharaf al-Dīn Maḥmūd ibn al-Furfūr（八七一／一四六七年、巡礼中にメッカで歿）（一覧⑦）とその息子のシハーブ・アッ＝ディーン Shihāb al-Dīn Aḥmad（九一一／一五〇五年歿）（一覧⑧）が同行した。[38] シリア地方に起源を有するムズヒル家は、ザイン・アッ＝ディーンの世代においてもダマスクス及びナーブルスに一族の拠点を維持し、[39] ダマスクスの法行政職の人事

特記事項	典拠
ザイン・アッ＝ディーンの後継者。後にハーッス庁長官、市場監督官、文書庁長官を歴任。	*Itḥāf*, vol. 4, p. 471.
夫バドル・アッ＝ディーン二世の死後アラム・アッ＝ディーン・アル＝ブルキーニーと再婚。	*Ḍaw'*, vol. 12, p. 26; *Itḥāf*, vol. 4, p. 471.
バハー・アッ＝ディーン・イブン・ヒッジーの娘、カマール・アッ＝ディーン・アル＝バーリズィーの孫。	*Ḍaw'*, vol. 12, p. 37; *Itḥāf*, vol. 4, p. 471.
3の兄／弟。エジプトのナーズィル・アル＝ジャイシュ職等を歴任。	*Itḥāf*, vol. 4, p. 472.
カマール・アッ＝ディーン・アル＝バーリズィーの甥。巡礼中はシャーヒド・アル＝キスワを務める。	*Itḥāf*, vol. 4, p. 472.
5の「叔父の娘」とあり、カマール・アッ＝ディーン・アル＝バーリズィーの娘ザイナブ、3及び4の母と推定される。	*Itḥāf*, vol. 4, p. 472.
ダマスクスのムズヒル家事務所代表。8の父。巡礼中にメッカで死亡。	*Ḍaw'*, vol. 10, p. 137; *Itḥāf*, vol. 4, p. 477.
ダマスクスのムズヒル家事務所代表。後にダマスクス及びカイロのシャーフィイー派大カーディーを兼任。	*Ḍaw'*, vol. 10, p. 137.
ダストの書記(ムワッキウ)の一人。	*Ḍaw'*, vol. 6, p. 53; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473.
ザイン・アッ＝ディーンの師、長年の親交。ザイン・アッ＝ディーンのマジュリスで *al-Shifā'* 等を教授。息子は同じく法学者のムハンマド Muḥammad (b. 850/1446) と推定される(*Ḍaw'*, vol. 8, p. 70)。	*Ḍaw'*, vol. 4, p. 294; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473.
法学者。カイロのムズヒル家墓所に埋葬。	*Itḥāf*, vol. 4, p. 472
カイロのムズヒリーヤ学院における教授(タサウウフ)、ハティーブ、イマーム。ラマダーン中にハディース読誦を担う。	*Ḍaw'*, vol. 8, pp. 282–284; *Itḥāf*, vol. 4, p. 472; *Wajīz*, vol. 3, p. 1032.
ザイン・アッ＝ディーンが師事。元サイード・アッ＝スアダー修道場のシャイフ。カイロのムズヒリーヤ学院における教授(クルアーン注釈学)。	*Ḍaw'*, vol. 5, pp. 48–49, vol. 9, p. 264; *Itḥāf*, vol. 4, p. 472.
881年には1とともに巡礼。13の後任として1によりカイロのムズヒリーヤ学院におけるクルアーン注釈学教授に任命(894. RM/1489. 8)。息子がムズヒリーヤ学院で結婚式(896. SF/1490. 12–1491. 1)。	*Ḍaw'*, vol. 9, pp. 263–264; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473; *Wajīz*, vol. 3, p. 1094, 1186.
メディナのムズヒリーヤ学院における教授(ハディース学)。ビカーイーの弟子。ザイン・アッ＝ディーンに *al-Ḥilya* 及び *al-Iḥyā'* を教授。	*Ḍaw'*, vol. 6, pp. 18–19, vol. 9, p. 285.
イブン・アラビーの主著『叡智の台座』の焚書を主張(888/1483年)、ザイン・アッ＝ディーンのもとに逃れ、死刑を免れる(*Badā'i'*, vol. 3, p. 203; *Ḍaw'*, vol. 8, p. 217; *Nayl*, vol. 7, p. 352)。ビカーイー及び12の弟子。	*Ḍaw'*, vol. 8, pp. 216–217.
相続法学者、計時学者。	*Ḍaw'*, vol. 9, p. 35; *Itḥāf*, vol. 4, p. 472.
法学者。	*Ḍaw'*, vol. 10, p. 252; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473.

【付表：八七一／一四六七年巡礼におけるザイン・アッ＝ディーン関係者一覧】

No.	名前	生没年	地位・属性
1	バドル・アッ＝ディーン三世 Badr al-Dīn Muḥammad ibn Abī Bakr ibn Muzhir	860-910/ 1455/6-1504	ザイン・アッ＝ディーンの息子
2	ハディージャ Khadīja ibna Amīr Ḥājj ibn al-Baysarī	d. 878/1474	ザイン・アッ＝ディーンの母
3	ズバイダ Zubayda ibna al-Bahā' Muḥammad ibn Ḥijjī	不明	ザイン・アッ＝ディーンの妻
4	ナジュム・アッ＝ディーン・イブン・ヒッジー Najm al-Dīn Yaḥyā ibn Ḥijjī	838-888/ 1435-1483	行政官 ザイン・アッ＝ディーンの妻の兄／弟
5	ザイン・アッ＝ディーン・アブドゥッラヒーム・アル＝バーリズィー Zayn al-Dīn ʻAbd al-Raḥīm al-Bārizī	818-874 1415-1469	行政官
6	ハーワンド・バーリズィーヤ Khāwand Bāriziyya ＝ザイナブ Zaynab ibna al-Kamāl al-Bārizī	d. 875/1470	ザイン・アッ＝ディーンの妻の母
7	シャラフ・アッ＝ディーン・イブン・アル＝フルフール Sharaf al-Dīn Maḥmūd ibn al-Furfūr	d. 871/1467	行政官
8	シハーブ・アッ＝ディーン・イブン・アル＝フルフール Shihāb al-Dīn Aḥmad ibn al-Furfūr	d. 911/1505	行政官
9	ダミーリーとその息子 ʻAlī ibnYūsuf al-Damīrī	818-882/ 1415/6-1477	書記
10	ムフィー・アッ＝ディーン・アッ＝トゥーヒー及びその息子 Muḥyī al-Dīn ʻAbd al-Qādir al-Ṭūkhī	812-880/ 1409-1475	学者
11	イブン・アッ＝サービク Jamāl al-Dīn Muḥammad ibn al-Sābiq al-Ḥamawī	811-877/ 1409-1473	学者
12	イブン・カースィム Shams al-Dīn Muḥammad ibn Qāsim ibn ʻAī al-Maqsī	817?-893/ 1414/5-1488	学者
13	カウラーニー Jamāl al-Dīn ʻAbd Allāh al-Kawrānī	818?-894/ 1415/6-1489	学者
14	イブン・アラブ Najm al-Dīn Muḥammad ibn ʻArab	b. 831/1428	学者
15	イブン・クライバ Nūr al-Dīn ʻAlī ibn Muḥammad ibn Muḥammad ibn Muḥammad ibn ʻAlī ibn Qurayba al-Maḥallī	850-922/ 1446/7-1516/7	学者
16	フライビー Shams al-Dīn Muḥammad ibn ʻAlī al-Ḥulaybī	不明	学者
17	マーリダーニー Muḥammad ibn Muḥammad ibn Aḥmad al-Māridānī	b. 826/1423	学者
18	イブン・アンマール Yaḥyā ibn Muḥammad ibn ʻAmmār	d. 888/1483	学者

に多大なる影響力を行使していた。後述するが、フルフール家は代々ムズヒル家の事務所代表を務めており、ダマスクスにおけるザイン・アッ＝ディーンの権力基盤の一端を担っていた。

b．ウラマー

八七一／一四六七年に巡礼を行なったウラマーのなかには、ザイン・アッ＝ディーン自身の師、もしくは彼のパトロネージ下にあった人物が数多く確認される。例えば、法学者ムフィー・アッ＝ディーン・アッ＝トゥーヒー Muḥyī al-Dīn ʻAbd al-Qādir al-Ṭūkhī（八一二～八八〇／一四〇九～一四七五年）（一覧⑩）は、ザイン・アッ＝ディーンのマジュリス（学的集会 majlis）でカーディー・イヤード al-Qāḍī ʻIyāḍ（四七六～五四四／一〇八八～一一四九年）著の『選ばれし者の諸権利を認識することによる癒し *al-Shifāʾ bi-Taʻrīf Ḥuqūq al-Muṣṭafā*』をはじめとするテクストを教授するなど、両者には長期にわたる学的交流があった。[40] 預言者ムハンマドの生涯と奇跡譚の詳細な記述である同書は、当該時期、家を守護し、読む者の病を癒す特別な霊力を持つと広く信じられていた。[41]

同行したウラマーのなかには、後にザイン・アッ＝ディーンが設立したマドラサで教鞭を執った人物もいた。ザイン・アッ＝ディーンの師であったカウラーニー Jamāl al-Dīn ʻAbd Allāh al-Kawrānī（八一八頃～八九四／一四一五―一六～一四八九年）（一覧⑬）は、八八五／一四八〇―八一年にザイン・アッ＝ディーンがカイロに設立したムズヒリーヤ学院におけるクルアーン注釈学教授に任命された。[42] カウラーニーの後任となったイブン・アラブ Najm al-Dīn Muḥammad ibn ʻArab（八三一／一四二八年生）（一覧⑭）、そして同学院におけるタサウウフのシャイフのほか、ハティーブ、イマームも務め、ラマダーン中のハディース読誦を担ったイブン・カースィム Shams al-Dīn Muḥammad ibn Qāsim al-Maqsī（八一七頃～八九三／一四一四―一五～一四八八年）（一覧⑫）も、巡礼に同行している。[43] イブン・アラブにはザイン・アッ＝ディーンの「旧友の一人 min qudamāʾ aṣḥāb-hi」として格別の配慮が与えられ、学院内に居住したほか、八八〇／一四七六年には息子のバドル・アッ＝ディーン三世とともに再度巡礼を行ない、彼によってカウラーニー没後の八九四／一四八九年、ザマフシャリー al-Zamakhsharī（一一四四年歿）著『啓示

の真理を開示するもの *al-Kashshāf 'an Ḥaqā'iq al-Tanzīl*』を教授する地位を与えられた。[44] また、イブン・クライバ・アル＝マハッリー Nūr al-Dīn 'Alī ibn Qurayba al-Maḥallī（八五〇～九二二／一四四六―四七～一五一六―一七年）（一覧⑮）は、後にメディナに完成したムズヒリーヤ学院におけるハディース学教授に任命され、学院内に居住した。[45]

サハーウィーによれば、イブン・クライバはザイン・アッ＝ディーンとともに巡礼を行ない、アブー・ヌアイム Abū Nu'aym al-Iṣfahānī（三三六～四三〇／九四八～一〇三八年）の『諸聖者の飾り *Ḥilyat al-Awliyā' wa Tabaqāt al-Aṣfiyā'*』、ガザーリー al-Ghazālī（一〇五八～一一一一年）の『宗教諸学の再興 *Iḥyā' 'Ulūm al-Dīn*』など、タサウウフに関する著作を講読し、親交を深めたことで、ムズヒリーヤ学院における諸職を委ねられたという。[46] 詳しくは続く第三章で述べるが、ザイン・アッ＝ディーンとの師弟関係に言及のないイブン・カースィムとイブン・アラブについても、同様に巡礼を通じて交流を重ねた結果、マドラサの諸職を得た可能性がある。

ザイン・アッ＝ディーンにとって、巡礼に自身の知己を同行させた意図が、既存の人間関係の強化・更新にあったことは容易に想像される。バドル・アッ＝ディーン二世没後のカマール・アッ＝ディーンによる後見、ザイン・アッ＝ディーンの妻ザイナブによる次世代の子弟の養育にみえるように、官僚名家としてのムズヒル家の系譜はバーリズィー家の出身者によって補完されており、一覧表にみえる同家出身の同行者は、このような両家の関係の深さを反映しているといえよう。ムズヒル家はムアイヤド・シャイフの権力掌握と同時にシリアからカイロに活動拠点を移すが（八一五／一四一二―一三年頃）、ヒジュラ暦九世紀を通じてダマスクスで権力基盤を維持し得た要因は、フルフール家との強固な結びつきに帰せられる。[47] 他方、フルフール家にとっても、中央政府でムズヒル家が栄達を遂げたことは明らかな利益をもたらした。ザイン・アッ＝ディーンの「最も栄光ある友人 ajall aṣḥāb」と表現されるシハーブ・アッ＝ディーンは、八八六／一四八一年、ムズヒル家との親交と三万ディーナールという巨額の上納金によって、ダマスクスのシャーフィイー派大カーディー職を手にした。[48] フルフール家は九〇二年ムハッラム月／一四九六年一〇月から九一三年ズー・アル＝カアダ月／一五〇八年三月まで、ダマ

スクスのシャーフィイー派・ハナフィー派大カーディー職を独占したほか、九一〇年ラビーウ・アル＝アウワル月／一五〇四年八月には、シハーブ・アッ＝ディーンがダマスクスとカイロのシャーフィイー派大カーディー職を兼任するという「前例なき」人事が行なわれた。[49]

また、巡礼という共通の目的を持った集団を通じ、新たなパトロネージ関係が構築された点も重要である。巡礼を通じて形成された人的関係の一部には、イブン・クライバの教授職への任命に示されるように、将来的なパトロネージに結びついたものもあった。同行したウラマーに対するザイン・アッ＝ディーンのパトロネージは、自身の設置した寄附講座やマジュリスへの招聘、人事権を有する諸職への任命が中心であったと考えられるが、法学者イブン・アッ＝サービク Jamāl al-Dīn Muḥammad ibn al-Sābiq al-Ḥamawī（八一一～八七七／一四〇九～一四七三年）（一覧⑪）に対しては、彼がカイロで没した際、埋葬場所としてムズヒル家の墓所が提供された。[50]巡礼者に対するパトロネージの多くは文化的であったが、後に政治的にも及んだ可能性を示唆するのは、イブン・カースィムの弟子であったフライビー Shams al-Dīn Muḥammad ibn ʿAlī al-Ḥulaybī（一覧⑯）の例である。八八八／一四八三年、フライビーが神秘主義思想家イブン・アラビー Ibn ʿArabī（一一六五～一二四〇年）による著作の焚書を主張したことで、マーリク派大カーディーのイブン・タキー Muḥyī al-Dīn ʿAbd al-Qādir ibn Taqī（八二四～八九五／一四二一～一四九〇年）によって不信仰の宣告が要求された。その際、フライビーはザイン・アッ＝ディーンのもとに逃れ、保護を受けた結果、死刑を免れたという。[51]

第三回巡礼時においてザイン・アッ＝ディーンが「諸般の面倒を見ていた」と評されるこれらの同行者と彼のキャリア上の関わりを総括すれば、ムズヒリーヤ学院の諸職に対する任命や大カーディーへの登用を通じ、彼らの大半は巡礼後もザイン・アッ＝ディーンの全面的パトロネージのもとに留まり続けた。巡礼を含むザイン・アッ＝ディーンの諸事業に基づいて獲得・強化された人的ネットワークは、彼による統制が容易に及ぶ、利害を共有する集団として、ムズヒル家の家系とその権力基盤を補完する役割を果たしたと考えられる。

三　ハラマインにおける慈善・善行

1．八七一／一四六七年巡礼における諸実践

（1）出発〜メディナ

続いて、巡礼時に確認されるザイン・アッ＝ディーンの行動形態と慈善・善行を具体的にみていくことにしよう。前述の通り、ザイン・アッ＝ディーンのラジャビーヤ巡礼団には聖者・スーフィーが含まれていたが、カイロ出発時において、「スーフィーたちに影を作る傘suḥāba を伴った」とある。[52] これは巡礼に向かうスーフィーが休息及び飲食をするためのドーム型のテントを指している。[53] 史料に具体的な記述はないが、ザイン・アッ＝ディーンが組織したスーフィーたちに対しては、道中の食糧等も提供されたと推察される。[54]

メディナに到着したザイン・アッ＝ディーンの一団は預言者モスクを訪問し、続いてメディナの人々に対し、彼らの所得に比例したサダカを行なった。[55]

メディナにおける善行で最も注目されるのは、預言者廟 al-Ḥujra al-Sharīfa の修繕工事である。ザイン・アッ＝ディーンは預言者廟の修繕を命じ、現地で大理石を自ら選定して購入したが、サハーウィーによれば、ザイン・アッ＝ディーンはそれに飽き足らず、修復工事そのものに加担したという。

> 彼は自ら労働者たちを手伝いはじめ、泥で満たされた桶を運んだ。豪奢な生活を営んでいた彼が［労働者の］真似をして荷担ぎをしたことは驚嘆を呼んだ。また同様に、自らの名で敷物係 waẓīfat al-firāsha も務めた。そこで［衣服の］中心をたくし上げ、蝋燭やその他を運ぶ役を務めた。これにより［メディナの人々は］恩恵を受けたのであった。[56]

「敷物係」とは、預言者モスク内の照明や敷物の管理を担った、ファッラーシュ farrāsh と呼ばれた用務員を指していると思われる。[57] ザイン・アッ＝ディーンは預言者廟の修繕費用を提供したのみならず、自ら建材の大理石を選定し、さらには資材運搬などの土木作業や雑務にも進んで加わるなど、廟内において強い指導性を発揮したことが確認される。

それ以外に預言者廟における宗教実践として伝えられるのは、預言者及び正統カリフのアブー・バクル、ウマルに対するドゥアーである。ザイン・アッ＝ディーンは

三者に対し、自らに危害を与えた人物に対しても、自分は危害を加えることはしない旨を証言してもらえるよう、祈願を行なったという。[58]

また、ザイン・アッ＝ディーンの名による金曜礼拝の実施も挙げられる。ザイン・アッ＝ディーンは預言者モスクのイマームからフトバを依頼され、丁重に辞退したが、預言者の御為という名目で一度限りという条件のもと、最終的に承諾したという。ザイン・アッ＝ディーンは開扉章を朗読した後、「今、こうして汝らには、汝ら自身の間から使者が遣わされて来ておる」（「悔悟章」第一二八節）という章句で説教を始めた。[59] ザイン・アッ＝ディーンが預言者モスクにクルアーン読誦に対するワクフを設定したことも伝えられるが、[60] それがこの巡礼に際してであったかは不明である。メディナにおいて最後に訪れた公共墓地バキーウは、預言者の妻ファーティマや第三代カリフ・ウスマーン、マーリク学派の祖マーリク・イブン・アナス　Mālik ibn Anas（九三～一七九／七一一～七九五年）らをはじめとする廟が位置し、預言者の一族と教友たち、学者、聖者らが埋葬されており、参詣対象として預言者モスクに続く重要性を有していた場所であった。[61]

（2）メッカ

諸史料の示す日付に基づけば、ザイン・アッ＝ディーンはメッカで約一一〇日間を過ごした。大巡礼開始までの間、ウムラ、タワーフなどの宗教実践を行なったほか、ムジャーウィルとして逗留する著名ウラマーのもとで学問修得に励んだ。特に自らのジャマーア（党派・集団 jamāʿa）の一部を率い、チュニス出身の禁欲アーリム・アブドゥルムウティー・アル＝マグリビー　ʿAbd al-Muʿṭī al-Maghribī（八二九／一四二五―二六年生）のもとを頻繁に訪問したという。[62] そこで学んだとされるテクストの『信徒たちへの方法論 *Minhāj al-ʿĀbidīn*』は、禁欲 zuhd と徳行 raqāʾiq を論じたガザーリーの著作であり、ザイン・アッ＝ディーンのジャマーアは、イブン・カースィムやカウラーニーら、随行員を構成したタサウウフのシャイフやスーフィーたちを指すと推定される。マグリビーの伝記には、ラジャビーヤ巡礼団で訪れたこの「有徳者たちのジャマーア jamāʿa min al-fuḍalāʾ」がその美徳と雄弁さを称賛したことで、彼は社会的地位を向上させたとある。[63]

ザイン・アッ＝ディーンはメッカ滞在の多くを勉学、特にタサウウフの修得に充てたと考えられるが、複数の

慈善・善行を手掛けたことも確認される。ラマダーン月に入ると、タラーウィーフ（ラマダーン月の夜に行なわれる礼拝）の席で、息子バドル・アッ＝ディーン三世によるメッカ市民に対する菓子の提供が行なわれた[64]。当時バドル・アッ＝ディーンは一一歳であり、実際に指揮を執ったのはザイン・アッ＝ディーンであったと考えられるが、息子の名で行なうことで、後継者としてメッカ社会に披露する目的もあっただろう。

ラマダーンに際しては、ザイン・アッ＝ディーン自身によっても貧者に対するサダカが行なわれた[65]。また寡婦及び身寄りのない人々を収容するため、サファーにリバートを設立するためのワクフを設定した[66]。さらにザイン・アッ＝ディーンは、長らく枯渇していたバーザーンの泉に自ら出向いて調査を行ない、多額の私財を投じて修繕を行なわせた[67]。水資源の乏しい前近代のヒジャーズにおいて井戸水は高価であったが[68]、ザイン・アッ＝ディーンが工事を指揮した結果、安価な水が供給されるようになったという。

同地における善行については、秩序の維持が注目される。一例を挙げれば、ザイン・アッ＝ディーンは狼藉を働く小姓たち ghilmān について、所属するジャマーアを問わず取り締まりを行なった[69]。また、ザイン・アッ＝ディーンの一行がメッカに到着すると、「偉大なる家 al-Bayt al-Mu'azzam」、すなわちカアバ神殿の扉が開かれることとなった。通常神殿内部は非公開であったため、市民の殺到による事故を危惧したザイン・アッ＝ディーンは、入場整理を行なうため自ら神殿の門に着座した。また、貧者や病人が神殿に上がれるよう、特別に人員を配置した。それによって集まった全ての人々がカアバ神殿の内部を訪れ、その恩寵に浴することが出来たという[70]。

第三回巡礼に際し、ザイン・アッ＝ディーンが多くの慈善及び善行を手掛け得た経済的背景については明確な言及がない。ヒジュラ暦八六〇年代においては、むしろムズヒル家の経済基盤の弱体化が示唆されている。八六五年ズー・アル＝カアダ月三日／一四六一年八月一〇日、ザイン・アッ＝ディーンはエジプトのナーズィル・アル＝ジャイシュ職を失うが、自ら辞任を申し出たとされる。ビカーイー Burhān al-Dīn Ibrāhīm al-Biqāī（八八五／一四八〇年歿）の年代記によれば、彼は同職の就任期間、ワズィールに対して毎日七〇ディーナールを支払う規定になっており、在職日数に基づけばその額は三万ディーナールに及んだ[71]。ザイン・アッ＝ディーンはナー

ブルスにあるムズヒル家の事務所から資金を調達し、要求された金額を捻出していたが、家産が著しく傾き、職の維持が困難になったという。[72] その後ザイン・アッ＝ディーンは八六六年サファル月／一四六一年一一月にナーズィル・アル＝ジャイシュに復職し、同年ズー・アル＝カアダ月二〇日／八月一六日、カーティブ・アッ＝スィッル職に就任した。[73] 父バドル・アッ＝ディーン二世が同職にあった約四年間（八一八年ジュマーダー・アル＝アーヒラ月／一四二五年五月～八三二年ジュマーダー・アル＝アーヒラ月／一四二九年三月）で二〇万ディーナールに及ぶ莫大な資産を形成したことに鑑みれば、[74] ザイン・アッ＝ディーンがカーティブ・アッ＝スィッル職就任後の五年間で大規模な巡礼及び寄進を行なうに足る資力を回復したことは十分考え得る。

だがフシュカダム治世はザイン・アッ＝ディーンにとってキャリアの絶頂期とはいえず、ダマスクスのカーティブ・アッ＝スィッルであったハイダリー Quṭb al-Dīn Muḥammad al-Khaydarī（八九四／一四八九年歿）ら、他の任官希望者との競合に晒されていた。[75] 第三回巡礼に際しては、カーティブ・アッ＝スィッル職経験者のムヒッブ・アッ＝ディーン・イブン・アッ＝シフナ Muḥibb al-Dīn Muḥammad Ibn al-Shiḥna（八九〇／一四八五年歿）を自らの代理とした。サハーウィーによれば、イブン・アッ＝シフナでなければ同職を簒奪しようとする勢力から保持し得なかったという。[76] 彼の権力基盤が安定するのはカーイトバーイ期以降であり、ヒジュラ暦八六〇年代から八七〇年代前半のザイン・アッ＝ディーンは、ウラマーに対するパトロネージを拡大し、彼と続く世代の子供たちが通婚によって有力者との紐帯を強化することで、カイロにおける官僚名家としての認知を獲得しつつある段階であった。[77] したがって、ザイン・アッ＝ディーンが計画性をもって多額の財を投じた巡礼とそれに付随した諸事業は、知己に対する統制と自身の名声を強化するための方策としてそのキャリア上に位置づけることができよう。

他方、聖地住民の意識に目を転じれば、巡礼に付随する善行に対し、高い期待が共有されていたことが諸史料から裏付けられる。サハーウィーはザイン・アッ＝ディーンのメッカ滞在について、「メッカの人々やムジャーウィルたちが彼から金を引き出そうとしたにもかかわらず、彼は慎み深く、献身的かつ親切で慈悲深いという、高貴な生き方を体現していた」と総括している。[78] ま

たラマダーン月にバドル・アッ＝ディーン三世がサダカを行なった際には、提供された菓子を市民が奪い合い、死者が出るところであったという。[79]

食の分配に代表される、市民レベルでの慈善の期待は、カイロにおいても確認される。「巡礼者の池」に帰還した支配エリートは、出迎えに訪れた政府関係者とともに、歌い手やタンバリン奏者らによって構成される楽隊を伴って市内まで行進したが、見物に訪れた市民に対して少額の硬貨や菓子を提供することが通例となっており、それを無視した振る舞いは強い非難の対象となった。[80]

このように巡礼に際してのサダカは、富者に課せられた社会的な責務ともいうべきものであった。参詣都市であり、学都でもあった両聖地は、イスラーム世界から広く貧者や学者を引き寄せていた。ヒジュラ暦八七一年の巡礼者のなかで最も高位であったザイン・アッ＝ディーンが、パトロネージを求めて聖地に集う人々の役割期待に応えたのは当然であったともいえよう。

2．八七一／一四六七年以降のハラマインに対する慈善と善行

（1）メディナの複合施設（マドラサ・リバート・墓廟）

続いて、巡礼以降に両聖地に対して行なわれたザイン・アッ＝ディーンによる慈善事業を概観しよう。メディナにおいて彼が手掛けた諸事業のなかで、最も大規模であったのはラフマ門に隣接して建設されたマドラサ・ムズヒリーヤを中心とする複合施設である。[81]同学院は八九三年シャウワール月／一四八八年九―一〇月にその大部分が完成したが、ザイン・アッ＝ディーンはその一カ月前にカイロで歿したため、完成を目にすることはなかった。だが第三回巡礼に同行したイブン・クライバのハディース学教授就任は彼自身による任命であることから、同学院の人事はザイン・アッ＝ディーンの知己を中心に生前に定められていたと考えられる。[82]

このマドラサには男女別の設備を有する二つのリバートがあり、九〇二／一四九六―九七年にはサハーウィーが滞在するなど、メディナに逗留するウラマーの宿泊施設としても機能していたほか、弱視とされる人物や寡婦など、社会的支援を必要とする人々の収容にも充てられた。[83]このようなムジャーウィルの宿泊施設や在住者に

対する救貧施設としての機能は、聖地に建設されたリバートに共通して確認される。[84]

ザイン・アッ＝ディーンはカイロ、エルサレムにおいてもムズヒル家の名を冠したマドラサを創設したが、[85]メディナのムズヒリーヤはドームを備えた埋葬施設を内包した点を特徴とする。バドル・アッ＝ディーン二世はカイロ・サフラー地区 al-Ṣaḥrāʾ に土地を取得し、[86]一族の墓地 turba として、ザイン・アッ＝ディーンの時代にはバドル・アッ＝ディーン二世とザイン・アッ＝ディーンの母ハディージャ、兄シハーブ・アッ＝ディーン Shihāb al-Dīn Aḥmad（八二〇～八五三／一四一七―一八～四九年）らが埋葬されていたが、彼は所有する二カ所の墓廟（サフラー地区、メディナ）にウラマー及び「諸聖者 al-ṣāliḥīn」を埋葬することを希望したため、郷里から離れて歿したムウタカド・スーフィーを含む有徳者の埋葬所としても機能していた。[87]前述の通り、この墓地には第三回巡礼の同行者であった法学者イブン・アッ＝サービクも埋葬されている。

だが、サハーウィーによれば、ザイン・アッ＝ディーンはこのカイロ郊外に位置する一族の墓ではなく、メディナに自らが創建した墓所への埋葬を強く希望していた

という。[88]官僚の墓廟は、その多くに食糧配給をはじめとする善行に充てたワクフが設定されており、その建設は比較的優先度の高い善行であった。[89]だがダマスクスからカイロへと活動拠点を移したムズヒル家においては、墓地に対する現実的な必要性があった。注目に値するのは、墓地の位置及び共に埋葬を希望する人物の選定にみえる宗教的指向性である。サフラー地区の墓地が一五世紀すでに参詣の対象となっていた禁欲聖者ミヌーフィー ʿAbdullāh al-Minūfī（七四九／一三四八年歿）の廟に隣接して建設されたことに加え、ムウタカドら聖性の高い人物が廟内に埋葬されていた。[90]さらにザイン・アッ＝ディーンは「イブン・ワリー・アッ＝ディーン Ibn Walī al-Dīn」の名で知られるシャリーフを指名し、廟に居住させた。サハーウィーによれば、彼の父は聖者 ṣāliḥ であり、その家系は「義なる一族 bayt ṣāliḥ」であるという。[91]ザイン・アッ＝ディーンは、最大の聖者である預言者ムハンマド廟の傍らに建設した学院に自らの墓廟を付属させ、[92]カイロと同様に傑出したウラマー及び聖者の埋葬地として受け入れを表明した。カイロ、メディナのいずれにおいても、ムズヒル家は「墓」を基軸として聖者との近接性を永続化する方法を選択したのである。

（2）メッカのリバート・サビール

メッカにおいては、第三回巡礼中にワクフを設定したサファーのリバートに加え、身寄りのない人々の収容を目的としたリバートを建設した。また、「ムジャーウィルの益に供する」ための二軒のサビール（給水所 sabīl）を建設し、上階は孤児を対象とした無償の教育施設 maktab al-aytām として利用された。[93]

聖地滞在者を指すムジャーウィルの多くは新来のウラマーであり、[94]特にこの術語で呼ばれる人物は、特別な霊力や超自然的力が備わっていると認知されていた。[95]ザイン・アッ＝ディーンのウラマーを対象とした慈善・善行はカイロに偏りをみせるが、[96]首都のウラマーに対するパトロネージ事業によって構築された人的ネットワークがザイン・アッ＝ディーンの権力基盤形成に資したことに比して、聖域に集うウラマーに対する保護には、より強い宗教的な含蓄があったと考えられる。

（3）メディナの給食ワクフ

第三は、メディナに対してカーイトバーイが設定した給食ワクフへの賛同と追加である。八八四／一四八〇年、巡礼の道中にメディナを参詣したカーイトバーイは、住民の窮乏を目の当たりにしたことを機に、八八五年ラビーウ・アル＝アウワル月／一四八〇年五―六月、貧者を対象とした六万ディーナールのワクフ設定を決定し、ダシーシャ（挽割小麦粥 dashīsha）、パン、油などを日々支給するための財源に充てられる旨がザイン・アッ＝ディーンによって宣言された。

八八八／一四八三年の預言者誕生祭に際し、この給食ワクフに対する二〇万ディーナールの財源追加が再びザイン・アッ＝ディーンによって発表された。[97]ザイン・アッ＝ディーンはダッジャージーン地区 khuṭṭ al-Dajjājīn にスルターンと共同で所有していたウィカーラ、カイサーリーヤを含む複合商業施設について、同年サファル月一〇日／一四八三年三月二〇日、自らの持ち分である二分の一に対してワクフ設定を行なっている。そして八九〇年ラビーウ・アル＝アーヒラ月二八日／一四八五年五月一四日、その一部をメディナにおけるダシーシャ、小麦、パンの配給に充当するため、ワクフ対象に関する規定を改めた。[98]

イスラーム諸国から巡礼者が集まるメッカ・メディナの両聖地は、同地における善行の効果の高さに加え、敬虔なムスリムとしてのイメージ形成の場としても相応し

かったといえよう。とりわけ一五世紀のメディナでは、イスラーム世界全体におけるムハンマド崇敬の拡大という背景のもと、スンナ派諸王朝からの「遠隔喜捨」が活発化していたが[99]、圧倒的な規模で慈善事業を展開したのはカーイトバーイであった。カーイトバーイは、上記の給食ワクフに代表される、同地の貧者に対する大規模なサダカを実施したほか、預言者モスクに隣接する位置にマドラサ、リバート、給水所等を建設し、八八七／一四八三年には罹災した預言者モスクの全面的改築を担った[100]。これらの諸事業においては、規模の差はあるものの、ザイン・アッ＝ディーンがメディナで手掛けた慈善・善行との間に共通性が確認される。

スルターンを含むマムルーク軍人が公正なムスリムの支配者であることを社会に明示するための手段として、彼らによるイスラーム的善行に政治的含蓄があったことは確かである。だが、ムズヒル家のようなアラブ・ムスリム家系出身の官僚にとって、善行の動機における政治性はマムルークに比して希薄であると考えられる。ザイン・アッ＝ディーンは文官として唯一アシュラフィーヤ学院 al-Madrasa al-Ashrafiyya の副管財人に名を連ね[101]、給食ワクフ事業の発足においては広報と自身のワクフ規定の変更を行なうことで、カーイトバーイがメディナで展開した慈善事業に深く関与した。だが、同マドラサの副管財人職はカーティブ・アッ＝スィッル職保有者に委託されており、給食ワクフはカイロとメディナの諸高官を巻き込んだ国家事業としての性格を有していた[102]。したがって、カーティブ・アッ＝スィッルの職掌に結びついた諸事業と、ザイン・アッ＝ディーンが個人の裁量に基づいて実施した諸事業は、分けて検討すべきであろう[103]。

歴代のマムルーク朝スルターンによるメディナへの寄進は、預言者モスク、とりわけ預言者廟に集中していたが、その主たる対象は墓周辺の構造物や環境の整備であった[104]。ザイン・アッ＝ディーンの聖地に対する慈善は第三回巡礼時が最初であるが、当時のスルターン・フシュカダムがメディナを対象とした慈善に注力したことを示す史料記述は確認されず、聖者廟の修繕を含む一連の善行は、王権の関与から離れ、彼自身の意向によって実施されたと考えられる。八八四／一四八〇年、メディナを参詣したカーイトバーイは、「畏怖と謙遜によって」預言者廟内に立ち入ることは差し控えたという[105]。それに対し、ザイン・アッ＝ディーンが預言者廟内部で泥桶を担ぎ、モスク内で雑用に従事するという積極性及びその地

位に不相応な振る舞いによってメディナ住民の耳目を集め、預言者と正統カリフたちの墓前で公正の実践を誓うドゥアーを行なったことは、歴代のスルターンとは全く異なる敬虔さの表明であった。また、すでにカイロ郊外の聖性の高い場所に一族の墓所が存在したにもかかわらず、晩年のザイン・アッ＝ディーンが「遠隔喜捨」によって預言者モスクに隣接する学院に自身の墓を内包させたという事実は、官職引退後にメディナで余生を送る希望を抱いていたことの表れであり、さらに同地にも聖者を埋葬することで聖性を重層化することが意図されていた。一ムスリムとしてのザイン・アッ＝ディーンとメディナとの関わりには、預言者ムハンマドを筆頭とする諸聖者と直に接触し、かつ彼らからの恩寵を恒久的に享受することへの願望が投影されていたのではないだろうか。

四．結論

ザイン・アッ＝ディーンはカーティブ・アッ＝スィッル職就任後も聖地訪問を繰り返し要請していたという。その具体的記述が得られるのは八八一年ラビーウ・アル＝アーヒラ月／一四七六年七―八月であり、カーイトバーイに対し、その年の巡礼団に加わり、ヒジャーズに逗留する許可を求めた。[106] だがカーイトバーイは、文民であるザイン・アッ＝ディーンに、通常は十人長もしくは四十人長のマムルークから選出される第一巡礼隊長職のヒルアを与え、その数日後に解任するという不可解な任免を行なった。マラティー 'Abd al-Bāsiṭ al-Malaṭī（八四四～九二〇／一四四〇～一五一四）によれば、これはザイン・アッ＝ディーンをカイロに留めることを意図したもので、巡礼の申請に対する強い拒絶の表明であり、当惑したザイン・アッ＝ディーンは自ら隊長職を辞したとある。[107] 結果として、ザイン・アッ＝ディーンの巡礼はカーイトバーイ治世以前に行なわれた第三回が最後となった。

有力官僚としてのザイン・アッ＝ディーンは、メッカ・メディナに対する大規模なサダカを行なうことで社会の要請に応えつつ、国家事業としての慈善にも深く関与した。注目すべきは、巡礼及び聖地での善行を通じた自らの権力基盤の拡大である。ザイン・アッ＝ディーンは巡礼に際し、自身の影響下にあったウラマーや行政官を伴ったほか、聖地滞在を通じて新たな人的関係を構築した。マドラサ、リバート等の宗教施設を設立する行為には、財を一族内に留めつつ、ポストに対する影響力を

次世代に継承させる効果もあった。巡礼時、「ザイン・アッ＝ディーンのジャマーア」に属したウラマーの多くが、後にザイン・アッ＝ディーンの創設した宗教施設で教鞭を執っており、ザイン・アッ＝ディーン没後は息子バドル・アッ＝ディーンが管財人として人事権を掌握したことを考慮すれば、ワクフ制度に基づく慈善は、人的関係の継承を念頭に置いた将来的な投資であったともいえよう。このような管理と表裏一体のパトロネージ下にあったウラマーや他の有力家系は、官職や宗教諸職への任命等を通じて便宜を受けつつ、ムズヒル家の権力基盤の一端を担う党派的な在り方を示し、彼の生存戦略の一部を成したのである。

他方、ザイン・アッ＝ディーンがイニシアティブを発揮した聖地における行動の諸形態には、彼自身の宗教的指向性が強く反映されているといえよう。巡礼におけるザイン・アッ＝ディーンの宗教実践は、タサウウフの修得と預言者との直接的接触を特徴とした。彼の慈善事業に関しては、カイロではウラマーの保護が中心であったのに対し、ヒジャーズにおいては、食糧配給、リバート、マクタブの設立、給食ワクフへの資金提供を通じた救貧に力点が置かれていた。その背景には、聖域に暮らす社会的弱者への善行を通じて自己の救済を求めるザイン・アッ＝ディーンの宗教感情と同時に、高い慈善の効果を期待して各地からのサダカが活発化した結果、両聖地が困窮者を強力に引き寄せていたという現実もあったと思われる。

最大の聖地メッカは言うまでもなく、巡礼の付随的な参詣地として捉えられがちなメディナに対しても[108]、ザイン・アッ＝ディーンは格別の関心を傾けていた。一連の行動や善行の前提に、当該時期のイスラーム世界におけるスーフィズムの拡大・預言者崇敬の深化という社会的潮流があったことは明らかであり、カーイトバーイの慈善事業との共通性も見出される。だがその実践方法に鑑みれば、官僚の慈善を同時代スルターンによるサダカの単純な縮小版として語ることはできない。今後、同時代のウラマーを含めた文民エリートによる聖地に対する関与の諸様態を分析することで、ザイン・アッ＝ディーンの諸事業が有した社会的含意もさらに明瞭となるであろう。

註

（1）マムルーク朝期の巡礼制度は、'Abdullāh 'Ankawi,

“The Pilgrimage to Mecca in Mamlūk Times”, *Arabian Studies*, 1, 1974, pp. 146–170 に示されている。政府高官による巡礼の形態は、Kathryn Johnson, “Royal Pilgrims: Mamlūk Accounts of the Pilgrimages to Mecca of the Khawand al-Kubrā (Senior Wife of the Sultan)”, *Studia Islamica*, 91, 2000, pp. 107–131; Doris Behrens-Abouseif, “The Maḥmal Legend and the Pilgrimage of the Ladies of the Mamluk Court”, *Mamlūk Studies Review*, 1, 1997, pp. 87–96 を見よ。メッカに対する寄進は、Richard T. Mortel, “Madrasas in Mecca during the Medieval Period: A Descriptive Study Based on Literary Sources”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 60/2, 1997, pp. 236–252; *idem.*, ““Ribāṭs” in Mecca during the Medieval Period: A Descriptive Study Based on Literary Sources”, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 61/1, 1998, pp. 29–50 を見よ。当該時期のメディナについては、長谷部史彦「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、今谷明編『王権と都市』思文閣出版、二〇〇八年、二〇九～二四五頁において、その概要と王権の関与形態が提示されている。ムジャーウィルの定義は同論文二二九頁を参照せよ。メディナに対する慈善に最も注力したスルターンとされるカーイトバーイの諸事業は、Doris Behrens-Abouseif, “Qaytbāy’s Foundation in Medina, the Madrasah, the Ribāṭ, and the Dashīshah”, *Mamlūk Studies Review*, 2, 1998, pp. 61–71 に詳述されている。

（2） 一五世紀後半のマムルーク朝は頻繁な任免による多額の賄賂収入を前提とした財政政策を採っていた。当該時期の売官問題については Aḥmad ʻAbd al-Rāziq Aḥmad, *al-Badhl wa'l-Barṭala Zamana Salāṭīn al-Mamālīk: Dirāsa ʻan al-Rishwa*, Cairo, 1979; Bernadette Martel-Thoumian, “The Sale of Office and Its Economic Consequences during the Rule of the Last Circassians (872–922/1468–1516)”, *Mamlūk Studies Review*, 9/2, 2005, pp. 49–83; Toru Miura, “Administrative Networks in the Mamlūk Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery”, in Tsugitaka Sato (ed.), *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks*, London, 1997, pp. 39–76 を見よ。

（3） Bernadette Martel-Thoumian, *Les civils et l'administration dans l'état militaire mamlūk* (*IXe*/*XVe siècle*), Damascus, 1992, pp. 391–414; Doris Behrens-Abouseif, *Cairo of the Mamluks: A History of the Architecture and Its Culture*, London/New York, 2007, pp. 21–23; 五十嵐大介「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業－ザイン・アッ＝ディーン・アブドゥルバースィトの事例を中心に」、中央大学人文科学研究所編『アフロ・ユーラシア大陸の都市と国家』中央大学出版部、二〇一四年、五一六～五一八頁。

（4） チェルケス・マムルーク朝期に複数の宗教・教育施設を創設した七名の官僚のうち、メッカ・メディナに施設を創設したのはザイン・アッ＝ディーンとアブドゥル＝

バースィト Zayn al-Dīn ʿAbd al-Bāsiṭ（八五四／一四五〇年歿）のみであった（五十嵐「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業」、五一九頁）。さらにこの七名のうち六名が財務系官職経験者であり、文書庁長官としてキャリアを重ねたザイン・アッ＝ディーンは、対象とした地域・自身のキャリアという両側面において例外的な位置づけにあることが分かる。

（5）彼の出身家系であるムズヒル家の構成員及び経歴については、Martel-Thoumian, *Les civils et l'administration*, pp. 267–281 に概要が示されているが、年代、人物の比定に修正を加え、彼らの経歴を再構成したものが拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像―ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの家系と経歴」『史学』八三（二・三）号、二〇一四年、三七～八一頁である。ザイン・アッ＝ディーンの手掛けた慈善は拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）―ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの公務と慈善」『史学』八四（一～四）号、二〇一五年、一三五～一八〇頁、通婚を通じたムズヒル家の生存戦略については拙稿 "The Muzhir Family: Marriage as a Disaster Mitigation Strategy", *Orient*, 54, 2019, pp. 127–144 を参照されたい。

（6）他方、ザイン・アッ＝ディーンと同じくヒジャーズに慈善を展開したアブドゥル＝バースィトについては、キスワ管財人という経歴、バルスバーイによるメッカにおける諸事に対する付託という政治的・職務的な関わりが指摘されている（五十嵐「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業」、五一四頁）。

（7）al-Sakhāwī, *al-Dhayl ʿalā Raf' al-Iṣr aw Bughyat al-ʿUlamāʾ wa'l-Ruwāh*, Cairo: al-Hayʾa al-Miṣriyya al-ʿĀmma li'l-Kitāb, 2000［以下 *Dhayl Raf'* と略記］, p. 484.

（8）サハーウィーによれば、ザイン・アッ＝ディーンはカマール・アッ＝ディーンの勧めに応じて必要物資を準備していたものの、他の有力者から独力で巡礼するよう干渉を受け、最終的には自身の名で巡礼団を組織したという（*Dhayl Raf'*, p. 484）。

（9）ヒジュラ暦八五〇年の巡礼団については、Johnson, "Royal Pilgrims", pp. 110–114 に詳述されている。

（10）副カーティブ・アッ＝スィッル時代のバドル・アッ＝ディーン二世については、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像」、四四～四七頁を参照されたい。

（11）ザイン・アッ＝ディーンの修得した学問及び師については、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像」、五〇～五二頁に詳述されている。

（12）ザイン・アッ＝ディーンが中央の官職を獲得したのは、八五七／一四五三年のナーズィル・アル＝イスタブル職が最初である（Ibn Iyās, *Badāʾiʿ al-Zuhūr fī Waqāʾiʿ al-Duhūr*, 6 vols., Cairo: Dār al-Kutub waʾl-Wathāʾiq al-Qawmiyya biʾl-Qāhira, 2008［以下 *Badāʾiʿ* と略記］, vol. 2, p. 314; *Dhayl Raf'*, p. 479; al-Malaṭī, *Nayl al-Amal fī Dhayl al-Duwal*, 9 vols., Beirut and Sayda: al-Maktaba al-ʿAṣriyya, 2002［以下 *Nayl* と略記］, vol. 5, p. 403）。

（13）ズバイダはバハー・アッ＝ディーン・ムハンマド・イ

ブン・ヒッジー Bahā' al-Dīn Muḥammad ibn Ḥijjī（八一二～八五〇／一四〇九～一四四六年）とカマール・アッ＝ディーン・アル＝バーリズィーの娘ザイナブ（後述）の間に生まれ、ナジュム・アッ＝ディーン・ヤフヤー・イブン・ヒッジーの姉／妹にあたる。彼女の系譜は拙稿 "The Muzhir Family", p. 134 を参照されたい。

(14) *Dhayl Raf'*, p. 484. 他方、スルターンの妻ムグルに関しては出発、帰還のいずれについても行進の具体的記述は得られない。ジョンソンはその理由として彼女とジャクマクとの関係が良好でなかったこと、彼女の有した役割が他のスルターンの妻たちに比して小さかったことを挙げている（Johnson, "Royal Pilgrims", p. 111）。

(15) ヒジュラ暦八六一年の巡礼は *Badā'i'*, vol. 2, p. 341; *Dhayl Raf'*, p. 484 に依拠したが、後者の原文では八七一年となっている。だがザイン・アッ＝ディーンが「二つの職、すなわちナーズィル・アル＝イスタブルとエジプトのナーズィル・アル＝ジャワーリーであった際」とされていることから、サハーウィーは八六一年を意図したものと考えられる。

(16) この年のザイナブの巡礼については、Johnson, "Royal Pilgrims", pp. 114–119 に詳述されている。

(17) 拙稿 "The Muzhir Family", pp. 135–136.

(18) Ibn Fahd, *Itḥāf al-Warā bi-Akhbār Umm al-Qurā*, 5 vols., Mecca: Jāmi'at Umm al-Qurā, 1983–1990［以下 *Itḥāf* と略記］, vol. 4, p. 474; al-Sakhāwī, *al-Tuḥfa al-Laṭīfa fī Ta'rīkh al-Madīna al-Sharīfa*, 2 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1993［以下 *Tuḥfa* と略記］, vol. 1, p. 36.

(19) *Dhayl Raf'*, p. 482.

(20) *Badā'i'*, vol. 2, p. 447; al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-Lāmi' li'l-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Cairo: Maktabat al-Qudsī, 1935–1937［以下 *Ḍaw'* と略記］, vol. 7, pp. 197–198, vol. 11, p. 89; *Dhayl Raf'*, p. 482; *Nayl*, vol. 6, p. 259（月の言及のみ）; Ibn Taghrī Birdī, *al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa'l-Qāhira*, 16 vols., Cairo: Dār al-Kutub wa'l-Wathā'iq al-Qawmiyya bi'l-Qāhira, 2005–2006［以下 *Nujūm* と略記］, vol. 16, p. 298.

(21) *Dhayl Raf'*, p. 482. カイロからメッカへの巡礼に要する日数は四五～五〇日間であり（'Ankawi, "The Pilgrimage to Mecca in Mamlūk Times", p. 108）、これを逆算してカイロ発の公式巡礼団は通常シャウワール月の中旬までに出発する。それに先んじてラジャブ月に出発する巡礼団 al-rakb al-rajabī は、聖都への長期滞在を希望する巡礼者によって構成されていた（'Ankawi, "The Pilgrimage to Mecca in Mamlūk Times", p. 147）。

(22) 第一巡礼隊長はアミール・アル＝ハージュ（巡礼隊長 amīr al-ḥājj）が率いる本隊 rakb al-maḥmil に先駆けて出発する第一隊 al-rakb al-awwal を統率する（'Ankawi, "The Pilgrimage to Mecca in Mamlūk Times", pp. 157–159）。

(23) *Dhayl Raf'*, p. 482.

(24) *Dhayl Raf'*, p. 483.

(25) *Dhayl Raf'*, pp. 482–483.

(26) *Itḥāf*, vol. 4, p. 471 にはシャアバーン月一二六日木曜日とある。

(27) *Dhayl Raf'*, p. 483.

(28) *Badā'i'*, vol. 2, p. 451; *Dhayl Raf'*, p. 484; *Nayl*, vol. 6, p. 273; *Nujūm*, vol. 16, p. 301.

(29) カイロ帰還時に行なわれる行進の実態については、Johnson, "Royal Pilgrims", p. 107, 122, 127 を見よ。

(30) *Dhayl Raf'*, p. 484.

(31) *Dhayl Raf'*, p. 482.

(32) *Itḥāf*, vol. 4, p. 471.

(33) サアド・アッ＝ディーンはザイン・アッ＝ディーンの息子たちのなかで最年長であったが、官職就任を示す記述がない。また「背中が湾曲している aḥdab」という身体的特徴があった（*Ḍaw'*, vol. 1, p. 35）。

(34) *Badā'i'*, vol. 3, p. 302.

(35) *Nayl*, vol. 8, p. 188; al-Sakhāwī, *Wajīz al-Kalām fī al-Dhayl 'alā Duwal al-Islām*, 4 vols., Beirut: Mu'assasat al-Risāla, 1995［以下 *Wajīz* と略記］, vol. 3, p. 1133.

(36) *Ḍaw'*, vol. 12, p. 37.

(37) *Itḥāf*, vol. 4, p. 472.

(38) *Ḍaw'*, vol. 10, p. 137; *Itḥāf*, vol. 4, p. 477.

(39) たとえばザイン・アッ＝ディーンはナーズィル・アル＝ジャイシュ職就任の際、要求された上納金をナーブルスで私設官房長を務めていた人物を通じて調達している（al-Biqā'ī, *Iẓhār al-'Aṣr li-Asrār Ahl al-'Aṣr: Ta'rīkh al-Biqā'ī*, 3 vols., Riyadh, 1992–1993［以下 *Iẓhār* と略記］, vol. 3, p. 343）。

(40) *Ḍaw'*, vol. 4, pp. 292–294; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473.

(41) Annemarie Schimmel, *And Muhammad is His Messenger: The Veneration of the Prophet in Islamic Piety*, Chapel Hill, 1985, p. 37.

(42) *Ḍaw'*, vol. 5, p. 49; *Itḥāf*, vol. 4, p. 472.

(43) *Ḍaw'*, vol. 9, pp. 263–264; *Itḥāf*, vol. 4, p. 473（イブン・アラブ）, *Badā'i'*, vol. 3, p. 254; *Ḍaw'*, vol. 8, pp. 282–284; *Itḥāf*, vol. 4, p. 472; *Wajīz*, vol. 3, p. 1032（イブン・カースィム）.

(44) *Ḍaw'*, vol. 9, p. 264; *Wajīz*, vol. 3, p. 1094.

(45) *Ḍaw'*, vol. 6, pp. 18–19, vol. 9, p. 285.

(46) *Ḍaw'*, vol. 6, p. 18, vol. 11, p. 89.

(47) 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像」、四三～四四頁。

(48) al-Ṣayrafī, *Inbā' al-Haṣr bi-Abnā' al-'Aṣr*, Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-'Āmma li'l-Kitāb, 2002, pp. 513–514. ダマスクスにおけるフルフール家とムズヒル家の関係については、Toru Miura, *Dynamism in the Urban Society of Damascus: The Ṣāliḥiyya Quarter from the Twelfth to the Twentieth Centuries*, Leiden, 2016, pp. 137–138 及び同著者による "Urban Society in Damascus as the Mamluk Era was Ending", *Mamlūk Studies Review*, 10/1, 2006, p. 161 に依拠した。

(49) *Badā'i'*, vol. 4, p. 84; Miura, *Dynamism in the Urban*

Society of Damascus, p. 138.

(50) *Ḍaw'*, vol. 9, p. 306; *Itḥāf*, vol. 4, p. 594; 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一五四頁。

(51) *Badā'i'*, vol. 3, p. 203; *Ḍaw'*, vol. 8, p. 217; *Nayl*, vol. 7, p. 352.

(52) *Dhayl Raf'*, p. 482.

(53) 五十嵐「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業」、五〇五頁。

(54) 同じくヒジャーズにおいて慈善を行なったアブドゥル＝バースィトは、巡礼に向かうスーフィーに対し、日傘のほか、道中飲食するための二五キンタール（約一一二五キログラム）のバクサマート（乾パン）と十分な量の水を提供した（五十嵐「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業」、五〇五頁）。

(55) *Dhayl Raf'*, p. 482.

(56) *Dhayl Raf'*, pp. 482–483.

(57) その職掌には、ラウダとフジュラのハーディムたちの長 shaykh al-khuddām のために絨毯を広げるほか、フジュラの門のカーテンの管理や夜間照明の準備が含まれる（長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二一四頁）。フジュラのハーディムたちについては、特に同論文二一九～二二〇頁を見よ。

(58) *Dhayl Raf'*, p. 483.

(59) *Ibid.* 預言者の到来を告げる章句。以下、「汝らが苦境に立っているのを見れば心せまる思いに悩み、（何事によらず）汝らの為よかれと念じ、すべて信仰ある人々に対してはやさしく、慈悲深い（使徒が…）」（日本語訳は井筒俊彦訳『コーラン（上）』岩波文庫、二〇〇一年、二七四頁に基づく）と続く。

(60) *Tuḥfa*, vol. 1, p. 36.

(61) 埋葬されている人物及び同墓地と預言者崇敬との関わりについては長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二一六頁を見よ。

(62) マグリビーの伝記は *Ḍaw'*, vol. 5, p. 80.

(63) *Ḍaw'*, vol. 5, pp. 79–81 を見よ。

(64) *Itḥāf*, vol. 4, p. 474.

(65) *Ibid.*

(66) *Ibid.*

(67) 泉の修繕に関する情報は *Dhayl Raf'*, p. 483 から得られたものであるが、そこでは「バーフラーンの泉 'ayn Bāfrān」と校訂されている。だがこれは「バーザーン Bāzān」の誤読であると考えられる。イブン・ファフドの『メッカ史』によれば、ハラム南東に位置するバーザーン門の由来となった「バーザーンの泉」は、ヒジュラ暦八世紀から九世紀にかけて断水と修繕を繰り返していた（e. g. *Itḥāf*, vol. 3, p. 235, 482, 566）。

(68) Richard T. Mortel, "The Mercantile Community of Mecca during the Late Mamlūk Period", *Journal of the Royal Asiatic Society*, 4/1, 1994, p. 32, 35.

(69) *Dhayl Raf'*, p. 483.

(70) *Ibid.*

(71) 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像」、五五～五

六頁。

(72) *Iẕhār*, vol. 3, p. 343.

(73) ザイン・アッ＝ディーンのナースィル・アル＝ジャイシュくの復職からカーテイブ・アッ＝スィッル就任の経緯については、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像」、五七～五八頁を参照されたい。

(74) Ibn Ḥajar al-ʿAsqalānī, *Dhayl al-Durar al-Kāmina fī Aʿyān al-Miʾa al-Thāmina*, Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1998, p. 251; *idem.*, *Inbāʾ al-Ghumur bi-Abnāʾ al-ʿUmr*, Beirut: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1975, vol. 8, pp. 190–191.

(75) *Badāʾiʿ*, vol. 2, p. 424; *Nayl*, vol. 6, p. 198.

(76) *Dhayl Rafʿ*, p. 481.

(77) 拙稿 "The Muzhir Family", pp. 131–132.

(78) *Dhayl Rafʿ*, p. 483.

(79) *Itḥāf*, vol. 4, p. 474.

(80) 九二二年ムハッラム月／一五一五年二―三月、ガウリー（在位一五〇一～一五一六年）の妻ウンム・スィーディー・ムハンマド Umm Sīdī Muḥammad が巡礼から帰還した際、市民に施しを行なわずに帰城したことを、歴史家イブン・イヤース Zayn (Shihāb) al-Dīn Muḥammad ibn Iyās（八五二～九三〇年頃／一四四八～一五二四年頃）は痛烈に批判している。それによれば、サダカくの期待を裏切られた市民は空腹を訴え、市内では彼女の吝嗇を風刺する詩が流布したという（*Badāʾiʿ*, vol. 4, p. 441; Johnson, "Royal Pilgrims", pp. 127–128）。

(81) *Wajīz*, vol. 3, p. 1040.

(82) 同学院における人員及び居住者については、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一七九頁の付表「三　メディナのムズヒリーヤ学院及びリバート関係者」を参照されたい。なお同学院にフトバは設置されていないが、これは預言者モスクとの近接性に因ると考えられる（Behrens-Abouseif, "Qāytbāy's Foundation in Medina", p. 69）。

(83) リバートの居住者の一人であるイスマーイール・アッ＝スブキー Ismāʿīl ibn Muḥammad ibn Sulaymān al-Subkī（八五〇頃／一四四六―四七年頃生）は、視力の低下により学業を断念し、ザイン・アッ＝ディーンのリバートに居住しつつ、預言者モスクでクルアーンを読誦するなど、内省の日々を過ごした（*Tuḥfa*, vol. 1, p. 184）。女性の社会的困窮者のリバートくの収容は、長谷部史彦「中世エジプト都市の救貧―マムルーク朝スルターンのマドラサを中心に」、長谷部史彦編『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、五二頁を見よ。

(84) 三浦徹「中世エルサレムにおける救貧」、長谷部史彦編『中世環地中海圏都市の救貧』慶應義塾大学出版会、二〇〇四年、一五三頁、長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二二五頁。

(85) 各都市のムズヒリーヤ学院の概要は拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一五〇～一五三頁を参照されたい。

(86) 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一五

四頁。

(87) *Ḍaw'*, vol. 11, p. 89; *Dhayl Raf'*, p. 479.

(88) *Wajīz*, vol. 3, p. 1040.

(89) 五十嵐「後期マムルーク朝の官僚と慈善事業」、五二三頁。墓地経営の実態及び墓ワクフに関しては、大稔哲也「一二―一五世紀エジプトにおける死者の街―その消長と機能の諸相」『東洋学報』七五（三・四）号、一九九四年、一七四～一七八頁を見よ。

(90) 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一五四頁。〝ヌーフィーの伝記は Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *al-Durar al-Kāmina fī A'yān al-Mi'a al-Thāmina*, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1997, vol. 2, pp. 189–190 を見よ。

(91) *Ḍaw'*, vol. 6, p. 30.

(92) メディナにおいて寄進者が死後の埋葬に対する明確な意思を表明して墓廟付きのマドラサを建設した例としては、イルハーン国のチューバーン Jūbān ibn Tadwān によるジューバーニーヤ学院が挙げられる（長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三二頁）。

(93) そのうち一軒については、マルワの「ムタイビーズの竈 furn al-Muṭaybiz」の向かいに位置していたという（*Ithāf*, vol. 4, p. 556）。マクタブの救貧機能については、Adam Sabra, *Poverty and Charity in Medieval Islam: Mamluk Egypt, 1250–1517*, Cambridge, 2000, pp. 80–83 を見よ。

(94) 長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二二九頁。

(95) 長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三〇頁。

(96) カイロ市内におけるザイン・アッ＝ディーンの慈善は、拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一五三～一五五頁を参照されたい。

(97) *Badā'i'*, vol. 3, pp. 164–165; *Nayl*, vol. 7, p. 255, 343; 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像（二）」、一四〇～一四一頁。

(98) 伊藤隆郎「マムルーク朝スルターン＝カーイトバーイのダシーシャ・ワクフ」『アジア・アフリカ言語文化研究』八二号、二〇一一年、三七～三八頁; Doris Behrens-Abouseif, "Qaytbay's Investments in the City of Cairo: Waqf and Power", *Annales Islamologiques*, 32, 1998, p. 31.

(99) 長谷部史彦「バフマニー朝アフマド一世によるカイロへのサダカ送付」『オリエント』四七（二）号、二〇〇四年、一四三頁。また同著者による「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三一～二三二頁も参照せよ。

(100) Behrens-Abouseif, "Qāytbāy's Foundation in Medina", p. 68. カーイトバーイのメディナにおける寄進・善行は、長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三四頁の表二に列挙されている。

(101) Behrens-Abouseif, "Qāytbāy's Foundation in Me-

dina", p. 65.

(102) 伊藤「マムルーク朝スルターン＝カーイトバーイのダシーシャ・ワクフ」、五二頁。

(103) ベーレンス＝アブーセイフはザイン・アッ＝ディーンが八八六／一四八一年、一時的にカーティブ・アッ＝スィッルを解任されたことに鑑み、メディナに対する給食ワクフの設定がスルターンによる強制であった可能性を示唆している（Behrens-Abouseif, "Qaytbay's Investments in the City of Cairo", p. 31）。だが彼自身がカーイトバーイ期以前から慈善活動を通じてメディナに高い関心を寄せていたことは疑いなく、この変更を意に反した行為と断定することはできない。

(104) 長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三三頁。

(105) *Tuḥfa*, vol. 3, p. 411; 長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二三六頁。

(106) 八八一／一四七六年にザイン・アッ＝ディーンが巡礼を希望した理由を示す明確な言及はないが、その前年、ナーズィル・アル＝ハーッス（ハーッス庁長官 nāẓir al-khāṣṣ、八七六～八八〇／一四七一―七二～一四七五年）職にあった息子バドル・アッ＝ディーン三世が義父のラージーン・アッ＝ザーヒリー Lājīn al-Ẓāhirī（八八六／一四八一年歿）、第三回巡礼で同行したイブン・アラブらとともに巡礼を行なっている（*Itḥāf*, vol. 4, p. 594; *Wajīz*, vol. 2, p. 863）。また、この頃ザイン・アッ＝ディーンの健康状態が一時的に悪化していたことも挙げられよう。八八二年ラビーウ・アル＝アウワル月／一四七七年六―七月、カーイトバーイのアレクサンドリア視察に際し、病を患っていたザイン・アッ＝ディーンは、侍医を伴って身体的負担の少ないナイル河経由で同地へと向かったが、アレクサンドリアから移動できないほどの深刻な病状であったという（*Badāʾiʿ*, vol. 3, p. 130; *Nayl*, vol. 7, p. 191）。

(107) *Nayl*, vol. 7, pp. 161–162.

(108) 長谷部は、マムルーク朝期におけるメディナ研究の立ち後れの理由について、同地への巡礼をメッカ巡礼の付随的な聖墓参詣として捉える見方が支配的であったことに帰している（長谷部「マムルーク朝期メディナにおける王権・宦官・ムジャーウィル」、二一〇頁）。

［付記］
本稿は住友生命保険相互会社第十二回「未来を強くする子育てプロジェクト／女性研究者への支援（スミセイ女性研究者奨励賞）」による研究成果の一部である。